

コメディ映画を世界で

行橋市の映画監督 橘 剛史さん (27)

身ぶりを交え演技を指導する橘剛史さん



妥協許さず、幅広げる

した。「セリフでなく、映像が語る映画」のために妥協はしない。この日も急ぎよ、一部の撮影場所を変更。日没までに撮り直し、日没直前にクランクアップした。

東京の専門学校で撮影技術などを学び、2009年から行橋市で撮影活動を始めた。制作はほぼ1年に1本のペース。脚本から撮影、編集まで1人で手掛ける。

評価は着実に上がっている。みやこ町などで撮影したセリフのない短編映画「心臓の弱い男」(13年)は、米アカデミー賞公認映画祭「シヨートシヨートフィルムフェスティバル&アジア」(東京)で入選。同市の劇団「風雷」が出演した連作ミニドラマ「コクのある小屋」(11・12年)は、福岡インディペンデント映画祭で優秀賞を受賞した。

小学生の時に見たSF映画「バック・トゥ・ザ・フューチャー」に感激し、映画監督の道を目指す。専門学校時代、研修で1週間過ごした米ハリウッドでの体験が将来の方向性を決めた。役者の演技力、降り注ぐ陽光…。映画の本場は刺激的だった。

「そのために、まず地元でお金をためながら映画を作ろう。

デジタル機器を使えば地方でも映画はできる。九州はアジアとの交流が盛んで、海外にも近いですね。昨年はオーストラリアで4カ月間、英語の勉強をした。音楽やプロモーション映画も手掛けた。これからは違うジャンルや作風にも挑戦していくつもりだ。

もし、家の中でしか生活したことがないトラが外に出ることになったら？ もし、緊張すると卒倒する男性が好みの女子に出会ったら？ そんなコメディータッチの短編映画を撮り続ける映画監督がいる。行橋市矢留の橘剛史さん(27)だ。故郷の同市を拠点とし、国内外の映画祭で受賞を重ねている。「いずれ世界で活躍したい」。その夢に向かって、橘さんは作品の幅を広げている。

「ゆっくりでいいから、体の動きで感情を表現して。日没まで時間もないけど、みんな頑張ろう」

8月下旬、平日の午後6時。山あいのみやこ町犀川伊良原地区で、新作短編「トラの家」の

最終ロケが始まった。エキストラやスタッフは全員が地元のプロランテニア。橘さんはトラやシマウマのかぶり物をさせた演者に動きを指示。カメラアングルを素早く決め、数カットを撮影



新作「トラの家」の映像の一部

(橘剛史さん提供)

文化の扉

(飯田崇雄)